

特集

実践知の学びを 再考する “わざ言語”

「看護とはサイエンスでありアートである」と言われてきました。これは、もう古い、意味をなさない言葉でしょうか。

看護基礎教育の「技術教育」は、戦後、看護技術をサイエンスとして、看護師全員の普遍的な技術の獲得をめざしてきました。そのために、卓越した実践である「技能」を、科学的言語で記述し、それを反復によって習得していくモデルに依ってきました。この考え方は、講義や学内で習った「基礎」を段階的に積み上げることによって、実習現場、あるいは卒後に「活用」することを目指すものです。

実際の教育現場でも、そのようにカリキュラムとして段階的に学ぶよう構成された知識や科学的な手順を、学生が看護実践に結びつけられない、という悩みが頻出しているようです。こうした悩みの背景の仮説として、看護のアートの部分が不十分と考えられるのではないのでしょうか。

今回の特集である“わざ言語”は、まさに上記のサイエンスの形式の学びについての疑問から、伝統芸能や楽器演奏、スポーツなど、身体をともなうアート“わざ”の伝承、学びに着目するものです。

看護という“実践知”を学ぶとはどういうことか。看護はサイエンスでありアートである、という考えから、現在の技術教育の問題点にふれ、より良い知の伝承をめぐるヒントとなれば幸いです。